

図書館通信

最上校図書委員会 No.13 9月25日

第2回 朝読書が始まります

期間 10月3日(月)~10月14日(金)

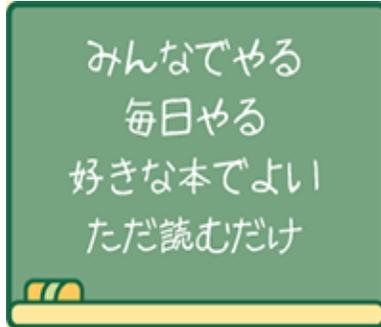
時間 8時20分~8時30分(10分間)

朝読書の4原則

※朝読書記録カードに、記入しましょう。

※雑誌やマンガ以外、読みましょう。

※本は前もって準備しておきましょう。



新庄北高最上校図書館10月開放カレンダー

10月図書館企画 第2回朝読書特集

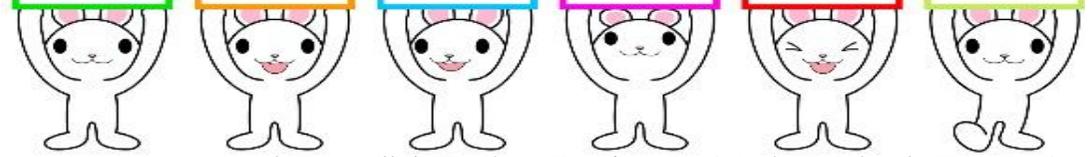
「高校生にオススメの青春恋愛小説！」

「第77回読書週間 10月27日~11月9日」

日	月	火	水	木	金	土
1	2	③	④	5	6	7
8	9 スポーツの日	⑩	⑪	12	13	14
15	16	⑰	⑱	19	20 文化祭準備	21 文化祭
22	23 代休	⑳	㉑	26	27	28
29	30	㉓				

※○数字の日が開放日です

高校生にオススメの青春恋愛小説



9月5日~15日まで、2階廊下において、読んでみたいと思う本に投票していただきました。本の順位が決まりましたので、以下の本を購入しました。

1位 『100日間、あふれるほどの「好き」を教えてくださいきみへ』

永良サチ著

「俺は海月と一緒にいたい」とストレートに気持ちを伝えてくれる悠真に心を動かされた海月は、一秒でも長く前向きに生きることを決意する。ふたりのまっすぐな愛に涙が止まらない!



1位

2位 君がひとりで泣いた夜を、僕は全部抱きしめる。

ユニモン著

隠された切ない秘密に、涙が止まらない!



4位

3位 君との終わりは見えなくていい 蒼山皆水著

未来を変えるために奮闘する

4位 今夜、消えゆく僕からたったひとりの君へ

六畳のえる著

2位

土元の「自分のままでいい」という言葉で優羽の考え方が少しずつ変わっていく。まさかのラストに涙する。



5位

5位 十月の終わりに、君だけがいない いぬじゅん著

蒼杜は由芽を死なせないために過去から来た人物だった。けれど、生き延びても死んでも、彼とは結ばれないと知ってしまう。

番外 夏の終わり、透明な君と恋をした 九条蓮著

3位

精一杯“今”を生きる2人の姿に涙する、消えゆく彼女と僕のひと夏の物語。



※ぜひ、図書館へ

番外

朝読書にオススメの新刊！



『書楼弔堂』 京極夏彦著

叔(さて)、本日はどのようなご本をご所望でしょうか？ 日露戦争の足音が聞こえる激動の時代に、本と人との繋がりを見つめなおす。

『名探偵のままでいて』 小西マサテル著

小学校の校長だった祖父は、七十一歳となり、レビー小体型認知症を患い、介護を受けながら暮らしていた。孫娘の楓が身の回りの謎について話して聞かせると、祖父の知性は生き生きと働きを取り戻すのだった！

『祝祭のハングマン』 中山七里著

法律が裁けないのなら、他の誰かが始末する。司法を超えた復讐の代行者。それが私刑執行人(ハングマン)現代版「必殺」ここに誕生！

『令和その他のレイワにおける健全な反逆に関する架空六法』

新川帆立 通称：令和反逆六法！ 新川帆立著

六つのレイワ、六つの架空法律で、現行法と現実世界にサイドキック！痛烈で愉快で洗練された、仕掛けだらけのリーガルSF短篇集。

『つぎはぐ、さんかく』 菟野江名著

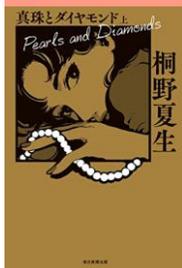
まもなく24歳になる主人公のヒロは、小さな惣菜屋「△(さんかく)」を1歳上の兄・晴太(はると)と営みながら、中学3年生の弟・蒼(あお)と3人で暮らしている。つつましくも穏やかな生活を送っている彼らだが、実はそれぞれに複雑な事情を抱えながら、ひとつ屋根の下で暮らしているのだった。

『浮遊』 遠野遥著

高校生のふうかは、会社経営の男の家で柔らかいソファに座り、男の元恋人を象ったマネキンの下、夜毎ホラーゲームで悪霊たちから逃げ続ける。

『真珠とダイヤモンド 上・下』 桐野夏生著

「バブル」実体なき熱狂の裏側をえぐる傑作長編！



『答えは市役所3階に』 辻堂ゆめ著

市役所に開設された「2020 ころの相談室」に持ち込まれたのは、切実な悩みと誰かに気づいてもらいたい想い、そして、誰にも知られたくない秘密。あなたなりの答えを見つけられるよう、二人のカウンセラーが推理します。明日への一歩のために、私たちは心を映す鏡になればいい。本当も嘘も映し出す鏡に。

『藍色ちくちく 魔女の菱刺し工房』 高森美由紀著

苦しい時、嬉しい時、そして誰かを想う時。布の目を数え、模様を作る。青森の南部菱刺しをテーマに描く、手芸×再生の四篇。

『荒地の家族』 佐藤厚志著

あの災厄から十年余り、男はその地を彷徨いつづけた。

元の生活に戻りたいと人が言う時の「元」とはいつの時点か。40歳の植木職人・坂井祐治は、あの災厄の二年後に妻を病気で喪い、仕事道具もさらわれ苦しい日々を過ごす。地元の友人も、くすぶった境遇には変わらない。誰もが何かを失い、元の生活には決して戻らない。仙台在住の書店員作家が描く、止むことのない渇きと痛み。

『踏切の幽霊』 高野和明著

マスコミには決して書けないことがある。都会の片隅にある踏切で撮影された、一枚の心霊写真。同じ踏切では、列車の非常停止が相次いでいた。雑誌記者の松田は、読者からの投稿をもとに心霊ネタの取材に乗り出すが、やがて彼の調査は幽霊事件にまつわる思わぬ真実に辿り着く。1994年冬、東京・下北沢で起こった怪異の全貌を描き、読む者に^{おの}慄くような感動をもたらす幽霊小説。

『木挽町のあだ討ち』 永井紗耶子著

ある雪の降る夜に芝居小屋のすぐそばで、美しい若衆・菊之助による仇討ちがみごとに成し遂げられた。父親を殺めた下男を斬り、その血まみれの首を高くかけた快拳は多くの人々から賞賛された。二年の後、菊之助の縁者という侍が仇討ちの顛末を知りたいと芝居小屋を訪れる。現代人の心を揺さぶり勇気づける令和の革命的傑作。

※ぜひ、図書館へ

